

『ツナグ』

辻村深月／著（新潮社）

不思議な力が受け継がれている家系の男子高校生・歩美とその祖母が、依頼人に一度だけ死者と会わせるお話しの連作短編集です。憧れのアイドル・病気の告知に悩んだ母・自分が殺したかもしれない親友・失踪した婚約者。会いたい死者も理由もバラバラです。依頼人はそれぞれ事情があって死者との数時間を過ごしますが、楽しい事ばかりでなく切なかったり悲しかったりの思いがあり、泣けてきます。たった数時間一度きりのことだから、優しさや愛おしさや憎しみや嫉妬という本心をさらけ出す描写は、人としてとても生々しいです。そしてこの不思議な力の継承を巡っても、歩美の両親の悲惨な死が絡んでいて、ミステリアスでもあり遣る瀬無い展開があります。群像劇的な人々のオムニバス小説の中にファンタジー要素が混じっている形態は、著者の得意技。近年は人気女流作家としてとても活躍されていますね。

『クラシック名曲全史—ビジネスに 効く世界の教養』

松田亜有子／著（ダイヤモンド社）

数百年の時を超えて、世界中で愛され続けているクラシック音楽。音楽は「聴衆」と「演奏者」がいて初めて形になるものです。どんなに作曲家が想いを込めた曲でも、演奏する人がその曲に惹かれなければ演奏されませんし、観客が「聴きたい」と感じなければ再演されることもありません。クラシックの世界もビジネスの世界同様、非常に厳しい世界です。そして今も聴き継がれ、残っている作品には生命力が宿っています。そのクラシックの歴史を知ることで、その時代の政治や経済の流れを体感することができます。著者はクラシック音楽のプロデュースも手がけ、音楽を通じて様々な出会いの場を届けています。本書では年代別に作曲者を取り上げ、時代背景とともにビジネス的な視線でとらえ直しています。ただ美しいだけのクラシックではなく、その背景の物語をも楽しんでいただけます。また、本書には登場する名曲を試聴できるQRコードがついて、実際に曲を聴きながら読書を楽しんでいただくこともできます。

『わたくしたちの成就』

茨木のり子／著（童話屋）

自分が反抗期を終えた瞬間を覚えている。高校の授業中、茨木のり子の「自分の感受性くらい」に頬をひっぱたかれ、あっけなく終わりを迎えた。詩人茨木のり子といえば「わたしが一番きれいだったとき」「寄りかからず」と、その凜とした雰囲気思わず背筋が伸びる作品が目立つ。しかし、本書は、先立たれた最愛の夫への想いを詠んだもので、そのまま帰らぬ人となった入院前夜「最後の晚餐」や遺品の椅子との思い出「椅子」など夫への思慕やどうしようもない寂寥感と今までにない彼女の姿を見ることができる。「いつもの日常」が急に姿を消すという稀有な体験をした現代日本において、どこか通ずる想いをもつ方がいるのではないだろうか。

『砂糖の通った道 菓子から見た社会史』

八百啓介／著（弦書房）

現代では簡単に買える砂糖も、江戸時代はとても貴重な輸入品でした。長崎街道は外国より輸入された砂糖を運ぶ主要ルートの一つであり、街道沿いの町々の菓子文化にも多大な影響を与えたことから、後に「シュガーロード」と呼ばれるようになりました。この本では砂糖の日本における歴史から、長崎・佐賀・福岡の菓子文化との関係、そして近代になって生まれたその土地の銘菓の由来などがわかりやすくまとめられています。

千鳥饅頭や八幡饅頭といった馴染み深い銘菓のルーツや、現代まで残る大手菓子メーカーの創業にまつわる話など、読み応えのあるエピソードが盛り沢山の一冊です。

『美しいものを見に行くツアーひとり参加』

益田ミリ／著（幻冬舎）

1969年大阪府生まれ。優しいイラストと、何気ない日常のエッセイが人気を博している著者は、無類の旅好き。著者が、実際に旅をして出会った人々、おいしい食べ物についてまとめた本も多く執筆している。

今回は、海外の“美しいものを見に行く”がテーマの旅エッセイである。当時、40歳になった著者は急き立てられるように、世界の美しいものを見たい衝動に駆られる。実行に移すか迷っていた時に著者の背中を押したのが、添乗員同行のツアー旅行。オーロラを見に行くツアーを皮切りに、リオのカーニバルなど本書の中で5か国を巡っている。自由気ままに街を歩いて、地元っ子気分を味わい、他のツアー参加者とささやかな交流を楽しむ姿に、すぐにでも旅に出たい気持ちにさせられる。さて、5つの旅を終えた著者が1番印象に残っている美しさとは・・・その答えは、ぜひ本書で確認してもらいたい。

『平安女子の楽しい！生活』

川村裕子／著（岩波書店）

「千年前にタイムマシーンで行ったらどんなことになるかな」あとの最初の最初に記載されているこの言葉。千年前は平安時代で、日記文学を研究されている川村裕子さんは、この時代の女子たちの暮らしや姿を色々な作品を見ながら再現したいな、と思いこの本を書きました。平安時代というと学校の授業でも取り上げられることが多いので、どこかで耳にしたことはあるでしょう。ただ、年号として覚えてはいるけれど、その時代の人たちがどんな家に住んで毎日どんなことをして過ごしていたかまで知っている人はそんなにいないのかもしれない。この本は平安時代の男女の生活からファッション、恋バナなどが書かれています。平安時代の女性は今のように自由に外に出ることは出来ず、辛い日々を過ごしていたのかと思いきや、夢や憧れを持って喜んだり悲しんだりしながら一生懸命自分たちの人生を生きている姿が描かれています。

『鉄のしぶきがはねる』

まはら三桃／著（講談社）

青春という言葉の威力を、久し振りに感じた一冊だった。

主人公の心（しん）は、北九州市内の工業高校に通う16歳。クラス唯一の女子ながら隣の席の男子がパンツ一丁でも泰然としている、クールな女の子である。そんな彼女が部活動や新たな出会いを経てものづくりコンクールを目指す、という物語だ。特に大きな事件は起こらない。誰も殺されないし、魔法もアクションもないが、心にとってはこれが「青春」であり、大半の大人たちもこんな十代を過ごしたはずだ。残念ながら忘れ去ってしまっているだけで。

児童書に分類されることもある青春小説だが、同時に、北九州出身の著者による鉄の都を舞台とした郷土小説でもある。「激しいほどに強い鋼の気配」に魅せられた心の青春を、懐かしさとともに味わってみて欲しい。

またこの本は、八幡図書館作成の冊子『郷土資料案内』でも取り上げている。ご興味を持たれた方は、そちらもぜひ併せてご覧いただきたい。

『戦争とおはぎとグリーンピース 婦人の新聞投稿欄「紅皿」集』

西日本新聞社／編

1954年～63年にかけて、西日本新聞の女性投稿欄「紅皿」に掲載された投稿の中から、戦争をテーマとした42編を収録した本です。戦争や戦後を生きた女性たちの等身大の姿が綴られています。文章中に登場する戦争に関連する言葉は巻末に解説もついていて読みやすいです。

戦争の残した悲しい爪痕は何年経っても消えないものだというのを、日々の何気ない投稿から窺い知ることができます。

それぞれは短い文章ですが、どれも戦争を二度と起こしてはいけないという平和への強い思いや、家族への愛情に溢れています。

戦後70数年を経て、当時の記憶が忘れ去られようとしている今だからこそ読みたい、女性たちの閉じ込めてきた本音が真に迫る貴重な記録集です。

『わたしのそばでできいていて』

リサ・パップ／作 菊田 まりこ／訳 (WAVE出版)

- ☑人前だと、緊張してうまく話せない。
 - ☑人前だと、うまく読めない。
 - ☑国語の授業が嫌いだ。
 - ☑そもそも字を読むことが好きではない。
- 1つでもチェックがついた方は、「わかる!!」と強く共感できる作品です。

読むことが苦手なマディは図書館で出会った犬のボニーに本を読んであげることになります。音読の練習を通したボニーとの関係性、マディの成長に、読後、優しい気持ちになると共に、教育の在り方について改めて考えさせられます。

この物語に登場する犬のボニーは一般的にはセラピードッグと呼ばれており、安らぎや癒しを与えるように訓練された犬たちのことで、私自身、この本を読んで調べ、その存在を知りました。海外の図書館で実際に活躍しているそうです。日本では彼らに読み聞かせをする図書館イベントの開催、福祉施設での触れ合いなど、接する環境が少しずつ展開されているようです。教育、福祉・介護に様々な立場で携わる方、そして、お子さんから大人の方まで多くの方に手に取っていただきたい作品です。

『世界の美しい書店』

WE LOVE BOOKSTORE』

今井栄一／著（宝島社）

私の見ていて楽しい風景の一つ、それは沢山の本が並んでいる様子です。書店や図書館のように沢山の本が並んでいるのを見ると、わくわくします。何が書かれているのか、綺麗な写真はあるのかと頁をパラパラと開いて、自分のお気に入りの本を探す時間はとても楽しい一時です。実際に目でみなくても、写真を通して本が沢山並んでいる様子は見ていてもあきません。そしてこの本では世界の美しい書店を写真とともに、その書店の歴史や街の様子、作者の旅で培われた知識が書かれており、読んでいるとその書店に愛着が湧いてきます。乾燥して暑く雨のあまり降らない土地ならではの屋外書店には、本は焼けないのだろうかと心配になったり、かつて劇場や教会の建物を利用した書店には、建築の美しさと本棚の調和にうっとりしたり。それぞれの本屋ならではの魅力が書かれていて、書店や図書館好き、はたまた、私のように本が並んでいる様子が大好きな人にお薦めの1冊です。

『中をそうぞうしてみよ』

佐藤雅彦＋ユーフラテス／作（福音館書店）

出題：身の周りにあるもの、その「中」をそうぞうしてみよ！

本書には椅子や針山、包丁などの写真が登場する。その「中」をそうぞうするとは？

著者はNHK教育テレビ「ピタゴラスイッチ」監修でおなじみ、佐藤雅彦氏とその研究室からなるクリエイティブグループ、ユーフラテス。『考え方の整頓』や『プチ哲学』でも見られた、佐藤氏の物事に対する考え方に一石を投じるテイストは本書でも発揮されている。

エックス線で透けて見える対象の「中」の写真に、大人が読むとあまり驚きはないが、子どもにとっては新鮮に映るだろう。中はどうなっているのだろうと想像する心は、探求心や洞察力などが育ち、心を豊かにしてくれる。是非大人と一緒にああじゃないかこうじゃないかとワイワイおしゃべりしながら読んでほしい科学絵本。普段おはなし絵本しか読まない子どもにもお薦めしたい。

『レッツゴー！ばーさん！』

平安寿子/著（筑摩書房）

普通の人々の日常を独特のユーモアを交えて描いた作品を多く手掛ける平安寿子の作品。この作品も「老い」をテーマにこれまたユーモアたっぷりに描いている。主人公、東西文子60歳は素敵なばーさんを目指し日々精進している。白髪薄毛問題、老眼問題、歯問題、物忘れ問題、ケガしやすい問題そして老親問題と若い頃気にも留めなかったことが続出するが、自分に合った方法で淡々と解決納得していく文子。老いることは嫌なことばかりではない、楽しく老いることが素敵なばーさんへとなる秘訣なのである。「金持ちだろうが貧乏人だろうが老いは平等」など沢山の文子語録も読んでいて心地よく楽しい。本書は、30代以上のまだ楽しく老いることを知らない大人の女性に向けたばーさん取り扱い説明書と言ったところである。